

北の大地における酪農衛生

北海道支所長



江口 正志

EGUCHI, Masashi

「トドネオオワタムシ」という名前を聞いて、その正体が頭に浮かぶ人はよほど昆虫に精通している人か、子供の頃からこの昆虫に慣れ親しんでいる人だと思う。だが「雪虫」といえばどうだろうか。具体的な形をイメージすることができなくても、名前だけは知っているという人が多いと思う。数ミリの大きさで、白い綿毛を羽織り、群舞する姿は遠目には雪が舞っているかのように見える。「雪虫」は北海道では、まもなく初雪が降るぞ、厳しい冬が近くに来ているぞ、ということを知らせる冬の使者である。今年10月半ばに見た。

北海道は12月頃から3月頃まで平均気温が氷点下となり、場所によっては12mを超える降雪をみる。かつては冬期間、東北地方ほどではないが、内地等への出稼ぎも少なからずあった。そうしないと生活が成り立っていかなかったからだ。北海道は夏場も冷涼であるが、飼料となる草やトウモロコシなどは生えた。しかも幸いにも土地の広さに恵まれていた。北海道の酪農はこのような状況下で発展してきた。酪農であれば年中、家族が一緒に生活でき、比較的安定した現金収入を得ることができた。今、北海道の酪農はその規模、生乳生産量において日本一である。乳用牛頭数(86万頭)は全国の52%を占め、その産出額は平成15年には3,500億円となった。北海道酪農の総産出額は北海道の畜産総産出額(4,800億円)の3/4近くを、農業総産出額の約1/3を占めている。日本において北海道酪農が、また北海道において酪農がいかに重要な地位を占めているかご理解頂けるだろう。動物衛生研究所北海道支所が酪農衛生に関する研究に、重点的に取り組む必要性を示す根拠の一つである。

今年の10月15日に帯広で、「十勝乳房炎協議会設立10周年記念シンポジウム」が開催された。十勝乳房炎協議会は現場の獣医師、畜産関係機関の有志らが創立した、十勝地域の乳房炎の対策を考え実践するための協議会である。彼らは日常の業務が終了した夜に集まり、疲れた身体にむち打ち眠い目をこすりながら、十勝の乳房炎を何とかしようと熱心に議論し、出てきた案を実践し、その

成績をまとめて学会、学術誌、普及誌などに発表する活動を10年間も続けてきている。頭の下がる思いである。シンポジウムで講演された菊池主任専門技術員の、経験から発せられた言葉が強く記憶に残っている。「酪農家は酪農家の話しか聞かない(もしかすると「酪農家は酪農家の話を聞く」だったのかもしれない)」、「乳房炎対策の基準は単純にしかも明確に!」、「何人も分類できない現象には対応できない」、「目標に向かうことが幸福感を生む」、「酪農家にやる気を持ってもらうためには酪農家の自尊心を尊重することが第一」、「酪農家は普段の仕事には誰よりも精通しているが、どうすると改善されるかは分からない」、「対策は現場から」など。みんな極めて示唆に富む言葉である。現場で乳房炎に日々対峙し、酪農家を指導している人の言葉には重みがある。

多くの先達たちがこれまで乳房炎に関する様々な研究に取り組み、多くの成果を上げてきた。動物衛生研究所も同様である。しかし乳房炎の被害は現在も酪農経営の最大の脅威であり続けている。研究者は現象を解析し、普遍的な秩序をその中に求め、その秩序を診断法や制御法として世の中に公表している。獣医師や普及員、専門技術員は自らの経験と日進月歩の知見や技術を総合して乳房炎の防除に専念している。酪農家は安全で安心なミルクを経済的に生産するよう努力している。みんな一生懸命に取り組んでいる。何が足りないのか。研究者、獣医師、専門技術者、普及員、酪農家、酪農施設製作者、乳業会社の人、心理学者、その他、関係者が同じ目標に向かって一緒に具体的に実践し、検証し、意識を共有する組織、場所が無い。研究者が現場の指導者や酪農家の声を聞き、彼らが求めている技術、情報を提供するための研究を行うことに加え、進んで実際の乳房炎防除活動に加わることも重要であると考え。乳房炎低減に関心を持つ様々な人々が一堂に会して、それぞれが進むべき方向とやるべき内容について話し合っているところと、そこで汗を流している北海道支所職員の姿を夢見る。